

幼小期における地域の色をテーマとした探究的学習の研究（Ⅱ）

—幼児の学びに向かう姿の分析を中心に—

大野 歩・麻生 良太・木村 典之・藤井 康子・西口 宏泰

A Study in Discovery-Oriented Learning about the Typical Colors in a Local Area for
Kindergarten and Primary School Education (II)
—With a Focus on the Learning of Kindergarteners—

OHNO, A., ASOU, R., KIMURA, N., FUJII, Y. and NISHIGUCHI, H.

大分大学教育学部研究紀要 第39巻第1号

2017年9月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 39, No. 1, September 2017

OITA, JAPAN

幼小期における地域の色をテーマとした探究的学習の研究（Ⅱ）

—幼児の学びに向かう姿の分析を中心に—

大野 歩・麻生 良太・木村 典之・藤井 康子・西口 宏泰

A Study in Discovery-Oriented Learning about the Typical Colors in a Local Area for
Kindergarten and Primary School Education (II)
—With a Focus on the Learning of Kindergarteners—

OHNO, A., ASOU, R., KIMURA, N., FUJII, Y. and NISHIGUCHI, H.

大分大学教育学部研究紀要 第39巻第1号

2017年9月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 39, No. 1, September 2017

OITA, JAPAN

幼小期における地域の色をテーマとした探究的学習の研究（II） —幼児の学びに向かう姿の分析を中心に—

大野 歩^{*1}・麻生 良太^{*2}・木村 典之^{*3}・藤井 康子^{*4}・西口 宏泰^{*5}

【要 旨】 本研究は、大分大学と大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）を中心に、大分県内において地域の「色」を主題とする教育実践研究プロジェクトの一環である。本研究においては、「色」をテーマとする教科融合型探究学習の基盤となる幼児期の学びの実態を明らかにすることを目的とした。このため、黒の遊びと白の遊びを通じた幼児の学びのプロセスについて、4つの視点（芸術・科学・言語学・社会学）から分析を行った。

【キーワード】 幼児期 色 探究型学習

I 問題の所在と研究の目的

世界におけるグローバル化が進展する一方で、わが国においては少子・高齢化やライフスタイルの多様化、地域社会のつながりの希薄化などが大きな社会問題となっている。このような現状を踏まえ、平成25年6月14日に閣議決定した第2期教育振興基本計画では、「自立」、「協働」、「創造」の3つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが今後の社会の方向性として打ち出された。この中では、「社会を生き抜く力の養成」が掲げられ、多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力を育てることが教育の使命であると述べられている。「社会を生き抜く力」については、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育成する「持続可能な開発のための教育（ESD）」の推進や、「キー・コンピテンシー」の養成にもつながるものであるととらえられており、社会全体の今後一層の発展を実現する基盤として育んでいくことが教育現場における課題のひとつとなっている（文部科学省2013）。

このような趨勢を受け、地方創生を進めるために地域の教育力を充実させることが肝要であ

平成29年5月31日受理

*1 おおの・あゆみ 大分大学教育学部生活・技術教育講座（保育学・幼児教育学）

*2 あそう・りょうた 大分大学教育学部附属教育実践総合センター（発達心理学）

*3 きむら・のりゆき 大分県芸術文化スポーツ振興財団企画室企画監（県立美術館学芸企画課企画監）（大分県教育庁義務教育課指導主事 併 教育センター指導主事）

*4 ふじい・やすこ 大分大学教育学部芸術・保健体育教育講座（美術教育学）

*5 にしごち・ひろやす 大分大学全学研究推進機構研究支援分野（機器分析部門）

日本保育学会第70回大会、川崎医療福祉大学、2017年5月21日、口頭発表

るととらえた大分県では、「学校教育・保育の充実と生涯を通じた学びの支援」を基本方針として打ち出した。基本方針では「幼児教育・保育の充実」、「子どもの力と意欲を伸ばす学校教育の推進」、「グローバル社会を生きるために必要な5つの力の「総合力」の育成」「「知（地）の拠点」としての大学等との連携」、「変化の激しい時代を生き抜く生涯を通じた学びの支援」の5つの方向性が具体的に示された(大分県教育委員会 2015)。

これらを踏まえ、大分大学と大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）、大分県教育委員会、学校現場が連携を図り、新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた教育実践研究プロジェクトに取り組んでおり、本研究はその一環に位置づくものである（藤井ら 2017）。

研究テーマに取り上げた「色」については、一般的に、可視光（目を通して認識した光の波）と色をともなって示されるものの2観点から捉えられる。後者には物質としての色彩（染料や絵の具などの色材）の他、生活文化と結びついた多様な意味が含まれる。例として『大辞泉（2012）』では、人の肌の色、表情としての顔色、態度や気配、華やかさなど12の意味が定義づけられている。人の身体や動植物、鉱物、衣服、食物や風土に至るまで存在する全てのものは色と結びついて認識されている。色がもたらす効果やその活用方法については国や地域によって捉え方が異なる場合もあるが、実に多種多様な学問・職業と結びついている。

教科融合型探究学習においては、①子どもたちが「色」をテーマとした課題に取り組む過程で、教科の枠組みを超えて蜘蛛の巣状に知識を統合していく、②子どもたちが新たな側面から地域の魅力を感じて、郷土への愛着、自尊感情など持続可能な社会を形成するための価値観を育む、の2点をねらいとしている（藤井ら 2017）。

以上のことから、本プロジェクトチームは、色をテーマとした探究型学習を通して各教科の内容を融合させることができると考えた。プロジェクト全体の目的は、全国的にも特異な地形・地質を有する大分県姫島村をはじめとする大分県内の各地域をフィールドとして、地域の「色」への気づきから自然科学、歴史、文化等に繋がる幼小期の探究的な学びを開発・実践・検証するものである。また、それら検証結果を基に4つの学問的視点（芸術・科学・言語学・社会学）を組み込んだ「色」をテーマとする教科融合型探究学習モデル（大分モデル）の開発とループリックの構築を目指している（藤井ら 2017）。

4つの学問的視点とは、本研究で取り組む学習モデルの内容と評価を明確にするために、各教科を学問的に分類して捉える観点である。芸術的視点は、色と人間の感性の関係性について芸術的に探究する活動であり、自分を表現すること、他者について知ることを目的とする。科学的視点は、光や物質の色に係る様々な現象を観察して調べること、実験から得られた結果やアイデアを基に推論する活動である。社会学的視点は、色と人間の関係について調べ、郷土の文化を知ること、郷土の文化特性を明らかにする活動である。言語的視点は、色と人間の身体の関係性について探ることを通して色の概念を構築すること、色を表す言葉を吟味して他者と伝え合う活動である。

以上を踏まえると、小学校教育の終わりまでを見通す教科融合型探究学習の流れにおいて、入口となる幼児期の学びは、はたして遊びにおける幼児のどのような姿として現れるのであるか。本研究は「色」を主題とする実践のなかでも、特に幼児を対象として、芸術・科学・言語学・社会学の4つの視点からとらえた幼児期の学びの芽生えを検証する。これにより、「色」をテーマとする教科融合型探究学習モデルの土台となる幼児期の学びの実態を明らかにすることを目的とした。

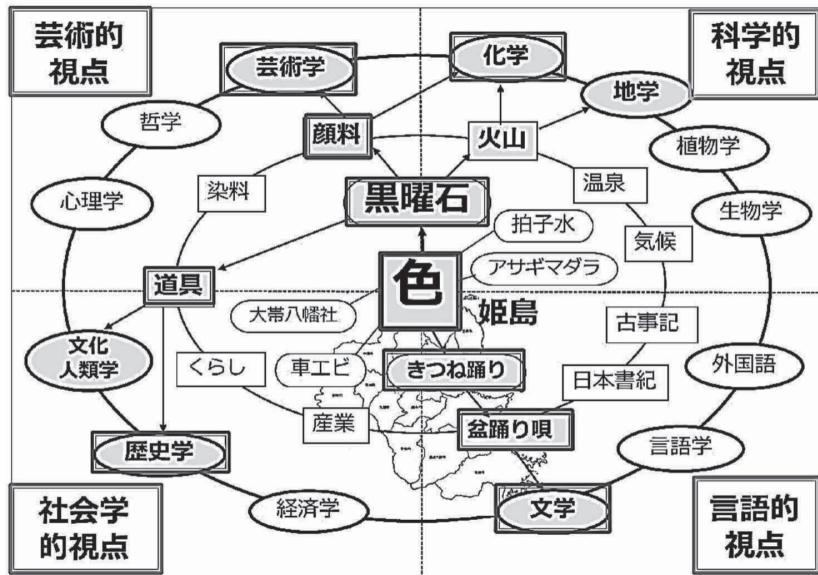


図1 4つの学問的視点を組み込んだ色をテーマとする探究的学習のイメージ

引用元：藤井康子・木村典之(2017)「地域の色をテーマとした探求学習の研究Ⅱ」第39回美術科教育学会 口頭発表資料

II 研究の方法

対象は平成29年度に姫島村立姫島幼稚園年長児クラスに進級・入園予定である年中児14名と年長児7名とした¹⁾。調査は、平成28年7月8日に幼稚園にて幼児の予備観察を行った後、平成28年11月7日および2月14日に本実践と観察を実施した。実践と観察、分析は次のとおりである。

1. 実践

1-1. 実践の位置づけ

対象園ではこれまでにも「色」にかかわる保育実践を継続的に行ってきた。ただし、色水遊び、色の手形遊び、玉ねぎを使ったハンカチの色染めなど、いずれも赤みや黄みなどの色みを持った物質としての色彩のうち有彩色を扱った活動であった。平成28年7月8日に実施した事前観察においては、幼児の無彩色に対する関心が薄い様子が伺えた。そのため研究チームでは、幼児に無彩色の美しさに出会う経験を味わわせることを目的として、黒と白をテーマとした遊びを立案した。本研究の目的を達成するためには、幼児期の段階から色に関する様々な情報を与え、色を感じ取る経験を積み重ねることで、色に対する感性を育んでいくことが重要であると考える。

1-2. 実践の内容

実践は、研究チームにおける美術教育の教員2名（木村・藤井）によって、無彩色のうち黒い素材だけを集めた「黒の遊び」と白い素材だけを集めた「白の遊び」各50分間を展開した。実践のねらいは、「黒/白の物質としての色の世界に全身で浸り、身体の感覚を使って、様々な素材の色・形・手触りなどに気づいたり、無彩色のバリエーションを感じ取ったりするなどして、自分のイメージに合った遊びを見つけて楽しむ」とした。5領域において経験させたい内容としては、次の通りとした。

- ・健康：黒/白の遊びに親しみ、楽しんで取り組む。
- ・人間関係：黒/白のたくさんある素材を大切にしながら、みんなで使う。
- ・環境：黒/白の素材に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- ・言葉：黒/白の遊びで感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- ・表現：黒/白の遊びの中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。



写真1 黒の遊びの様子



写真2 白の遊びの様子

環境構成においては、各色大きさや見た目、感触などが異なる35種類程度の素材を用意した（表1）。また、周囲の壁面をカーテンや布で覆うなどして室内をなるだけテーマとなる色で統一し、実践者や観察者も環境の一部としてテーマに沿った色合いの服装で場に臨んだ。

「黒の遊び」の展開については、表2に示したとおりである。尚、「白の遊び」については、実践内容、進行ともにほとんど同じであるものの、導入で「好きな色あつまれ」の代わりに「黒の遊び」をふりかえる活動があったことを明記しておく。実践は、幼児の身の回りにあるような小さな素材に触れることから始めた。幼児の遊びの展開に合わせて徐々に大きな素材を投入して場の転換を図り、小さな素材だけでは遊びに入り込みきれない幼児や、他児に圧倒され隅の方で活動を眺めているような幼児²⁾を巻き込めるよう工夫をした。

2. 記録

記録については、自然観察法による幼児の観察を中心に、定点によるビデオカメラ記録、観察者(大野・麻生)による写真記録と筆記記録をとった。

表1 遊びで用いた素材

	黒の遊び	白の遊び
1	トイレットペーパー	トイレットペーパー
2	ロープ	ロープ
3	ビニール袋(大)	ビニール袋(大)
4	ビニール袋(中)	ビニール袋(小)
5	ビニール袋(小)	持ち手つきビニール袋
6	毛糸	毛糸
7	フリース毛糸	布
8	シーツ	フェルト布
9	シルク布	不織布(長)
10	綿棒	不織布(短)
11	黒豆	白花豆
12	ゴム紐(細)	大手亡豆
13	ゴムバンド	ゴムバンド
14	タオル(大)	キッチンペーパー
15	タオル(小)	キッキンペーパーの芯
16	洗濯ばさみ	ビニールテープ
17	紙やすり	マジックテープ
18	スポンジ(四角)	洗濯ばさみ
19	たわし	スポンジ(四角)
20	マット(長方形)	紐
21	マット(丸)	紙ナプキン
22	マット(フェルト)	マット
23	紙コップ	紙コップ
24	紙皿	紙皿(大)
25	リング	紙皿(中)
26	糸	紙皿(小)
27	マジックテープ	ネット
28	ネット	バラ緩衝材(四角)
29	ネジ	バラ緩衝材(細長)
30	ビス	梱包用エアクッション
31	薄紙	和紙ロール
32	画用紙	習字半紙
33	段ボール紙	薄紙
34		画用紙
35		タオル

表2 遊びの展開（黒の遊び）

時間	子どもの活動	環境構成・援助のポイント
10:50	<ul style="list-style-type: none"> ○T1&T2に出会う ○色を意識した遊びに触れる <ul style="list-style-type: none"> ・「好きな色あつまれ」 ○黒の素材と出会う 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶を交わして、初めて会う T1&T2 と楽しく遊べるような雰囲気をつくる。 ○遊びを楽しみながら、ひとりひとりが自分の好きな色を考えて、思いを伝えられるよう支える。 ○黒い薄紙とトイレットペーパーを用意し、黒の部屋で行う遊びへの期待が膨らむよう一人ずつ素材にしっかり触れさせる。
10:55	<ul style="list-style-type: none"> ○黒の部屋に移動する ○黒の広場の周りにあつまって、黒の素材についてみんなで考える 	<ul style="list-style-type: none"> ○黒の素材で部屋を覆い、子どもが遊びの世界に入り込めるような環境を整える。 ○いろいろな黒があることに子どもたちが気づくように、広場にある素材をよく見るよう促す。 <ul style="list-style-type: none"> ・集まる際には、子どもが重ならないように言葉をかける。 ・「どんなものがあるかな」「触ったらどんな感じだった？」などと言葉をかけ、広場に置かれた素材を一人一人が見たり触れたり感じたりできるよう見守る。 ・「気持ちいい」「これが好き」などという子どもの思いを「そうだね」などと共に感しながら受けとめる。
11:00	<ul style="list-style-type: none"> ○黒の小さな素材を選んで好きな遊びをする <ul style="list-style-type: none"> ・黒の風船 ・黒のふわ紙 ・黒い穴 	<ul style="list-style-type: none"> ○遊びの中で子どもが素材の違いや色みの違いに気がつくように促す。一人一人が好きな素材で遊べるように、種類や数を豊富に用意しておく（表3参照）。 <ul style="list-style-type: none"> ・息を吹き込んだ後のビニール袋が上手く結べないときは「手伝いましょうか」と言葉をかけ、遊びに入れるように支える。 ・薄紙をくしゃくしゃと握ったり、のばしたりする姿があるときは「面白いね」と共感しながら、「不思議な形だね」「何ができたのかな」などと言葉をかけて素材の変化に気づくよう支える。 ・穴のぞき込んだり、ビニールをすかしたりする姿がみられる時には、「何が見えるのかな」「あれ、園庭が見えるよね」などと言葉をかけ、光と素材の変化的関係に気づくよう促す。
11:15	○黒の部屋を黒の世界に	○遊びの場を自分たちで作り変えることに挑戦した

	変身させる ・黒のじゅうたん ・黒のカーテン ・黒のタワー	くなるように環境を変化させながら、個々にじっくりと素材とかかわる遊びから、身体を使いながら全身で素材とかかわる遊びへと遊びが転換するようになる。 ・部屋を横断するように絨毯を広げ、ゴロゴロと寝転がったり、じゅうたんに包またりして、体を大きく使って素材とかかわるようにする。 ・カーテンを広げたまま頭上を横切って、素材に覆われるような感覚が持てるようになる。その際、「天井に何が見えるかな」などと言葉をかけ、黒のカーテン越しに部屋を見回せるよう促す。部屋の隅の方にいる子どもも巻き込めるように大きく動く。 ・脚立をビニールで覆った黒のタワーを出して、部屋の中央に置き、中をのぞいたり、もぐったりする姿を見守る。 ・小さな素材でじっくり遊んでいる子どもには、活動を見せつつも、その子の遊びを尊重する。
11:30	○片付ける	○教師同士で連携しながら、遊びの切りがつきそうな場から言葉をかけ、「こんなのができたんだね」「楽しかったね」と遊びが楽しかった気持ちを大切にしつつ、片付けがスムーズにできるようになる。
11:35	○黒の遊びをふりかえる	○子どもたちと一緒に遊びをふりかえり、気付いたことや色に対して感じたことを出し合う機会をつくり、黒にもいろいろな黒があることを確認する。
11:40	○クラスに戻る	○楽しかった気持ちを持ちつつ、落ち着いて降園準備に取りかかれるように促す。

3. 分析の手続き

遊びで見られた4つの視点の学びについては、次のように定義づけてエピソードの検討を行った。

- ・芸術的視点：気に入った素材を選んで、全身で色の素材に触れたり素材の特徴を確かめたりして、素材を活かした遊びを楽しむ。
- ・科学的視点：色の素材に触れながら、色や素材に興味を持ったり色や素材の変化を不思議に思い、色や素材を観察したり試したりしながら遊ぶ。
- ・社会学的視点：色の遊びをきっかけとして、自分の生活環境や自然など身の回りの暮らしの中に様々な色があることに気づく。
- ・言語学的視点：色に対する思いや色について感じたり考えたりしたことを言葉で表し、友だちや先生に伝える。

ただし、これら4つの視点は5領域と直接結びつくものではなく、4つの視点を取り込んだ

実践が 5 領域における「ねらい及び内容」によって育つ幼児の姿を含んでいるものとして分析を行った。

分析は、研究チームの 2 名(大野・麻生)が行った。手続きとして①記録をもとに幼児の学びの姿を抽出する、②幼児の姿からエピソードを書き起こす、③エピソードから幼児が経験していることを切片化する、④幼児の学びの芽生えをドキュメンテーションにまとめる、⑤ドキュメンテーションをもとに、4 つの視点における学びを評価する、という過程を踏んだ。書き起こされたエピソードの総数は 15 であった。

これらにより、小学校以降で展開されている教育実践において、児童のワークシートや振り返りシートの記述内容およびパフォーマンス課題によって評価を行う方法との区別化を図り、幼児期における教育と幼児の学びの特性の担保について配慮した。

III 結果と考察

それぞれ以下では、遊びの中で見られた幼児の学びに向かう姿の中から 4 つの視点における代表的なエピソードと遊びにおける幼児の経験、学びのみとりを示す。

1. 芸術的視点

【エピソード 1：がああああ】

脚立に黒いビニールを張り合わせて覆った「黒のタワー」を目にした A 児は、部屋をぐるっと回りながらゆっくりとタワーに近づく^①。タワーの前に来ると、タワー全体を見渡し^②、次の瞬間下の隙間からタワーの中に潜り込む^③。ごそごそと中で動く様子があり、しばらくすると、A 児はタワー中央部にあるビニールの継ぎ目からにゅうっと顔を出す^④。ニコッと歯を見せて笑う^⑤、すぐにタワーの中へ顔をひっこめる^⑥。A 児はビニールの継ぎ目にできる隙間から外の様子をのぞき、通りすがりの友だちを待ち伏せては、急に顔を突き出して「がああああ！」と驚かせる^{⑦⑧}。大きな笑顔で「きやあああ」と応え走り去る友だちの姿に、A 児はますます張り切って^⑨、「がああああ！」「がああああ！」「がああああ！」^⑩と繰り返し友だちを驚かせようとする^⑪。



写真3 黒のタワーから外をのぞくA児



写真4 友だちを見つけて顔を突き出すA児

【幼児の経験】

- ①素材に近づく。
- ②素材をじっくり観察する。
- ③素材の中へ全身で入り込む。
- ④素材の内側から外の世界を見る。
- ⑤イメージが浮かぶ。
- ⑥遊びを思いつく。
- ⑦自分のイメージを友だちに伝えようとする。
- ⑧友だちの反応を期待する。
- ⑨友だちが自分のイメージに応えてくれたことで達成感を味わう。
- ⑩イメージを広げる。
- ⑪遊びに夢中になる。

【学びのみとり】

A 児は素材に近づき、観察し、素材の中へ全身を投じる。素材の内側から外の世界を見直すこと、あるイメージを浮かばせる。そして、自分のイメージを遊びとして表現することを思いつく。A 児はタワーの隙間から顔をのぞかせて「がああああ」と叫ぶことによって、自分のイメージを友だちに伝えようとする。友だちから反応が返ってくることで A 児は自分のイメージが友だちに伝わったことがわかり、喜びを感じる。さらに、A 児は自分のイメージを広く伝えようと相手を変えながら遊びを続ける。その都度友だちに自分のイメージを認めてもらうことにより、A 児は満足感や達成感を味わい遊びに夢中になっている。

【考察】

このエピソードでは、幼児が黒の素材に出会い素材を観察する中で、素材に近づきたい気持ちが大きくなり、ついには内部に入るに至るほど素材と接近している。そして、外側から観察していた素材の内側から顔を出して、改めて外側の世界を見回すことで目線が変わり、イメージが沸き起きたのではないかと推察される。また、そこで目にした友だちに、この自分のイメージを伝えたいという思いから遊びが生まれていることがわかる。ここからは、幼児—素材—他者の三項関係が本エピソードにおける創造性の基盤となっていると考える。

2. 科学的視点

【エピソード 2：ふ～、ふー、ふうっ】

黒の遊びの際、全身を使って黒の薄紙で遊んでいた B 児。白の遊びで白の薄紙を手に取り^①、少しだけヒラヒラと紙をなびかせる^②と、黒の遊びの際に遊んだように、紙を吹いて宙に飛ばし始める^③。B 児はまず、紙と顔が平行になるように首を 90 度近くしっかりと曲げる^④。その状態で紙の中央部分をめがけて息をふ～っと吹きかける^⑤。薄紙がふわっと少しだけ宙に浮くと、今度は唇をすぼめて^⑥、ふーーっと強めに息を吹きかける^⑦。薄紙が宙に高く舞い上がる^⑧と B 児は息を深く吸う^⑨。紙が落ちてくるタイミングに合わせて^⑩、B 児は手が紙に触れないよう大きく手を広げる^⑪と再びふうっと柔らかく息を吹きかける^⑫。薄紙はふわふわふわっと揺れながら宙にとどまる^⑬。B 児は真剣な顔つきで^⑭息の吹き方を変えながら^⑮、薄紙が宙にとどまるよ

う、何度も何度も薄紙へ息を吹きかける^⑯。



写真5 白の薄紙を息で飛ばし始めるB児



写真6 唇をすぼめて強い息を試すB児



写真7 紙が落ちてくる合間に息を深く吸B児



写真8 優しい息の吹き方を試すB児

【幼児の経験】

- ①素材に触れる。
- ②素材の感触を確かめる。
- ③これまでの遊びの経験を活かす。
- ④紙に息がうまく当たるような姿勢を工夫する。
- ⑤紙がうまく舞うような息の吹き方を工夫する。
- ⑥息を吹く体勢を変えて試す。
- ⑦息の吹き方を変えて試す。
- ⑧試みが成功する。
- ⑨意識を紙に向けつつ全身の筋肉を使う。
- ⑩対象をよく観察し間合いを図る。
- ⑪身体のバランスをとる。
- ⑫さらに体の機能を調整しながら、うまくいく方法の予測を立て新たな息の吹き方を試みる。
- ⑬予測通り成功する。
- ⑭集中する。
- ⑮紙が舞う方法について予測を立てながらいろいろな方法を試みる。

⑯飽きることなく繰り返し挑戦する。

【学びのみとり】

B児は以前の遊びで気に入った素材を手に取る。B児は素材の感触を確かめながら遊びの記憶をたどり、これまでの遊びの経験を活かして遊び始める。遊びにおいては、自分なりに紙が上手く宙に舞うような息の吹き方について予測を立て、姿勢や息の吹き方を工夫しながら何通りも試みる。B児は真剣な顔つきで紙の状態を観察しつつ、体の細部や全体を調整しながら息の吹き方を変化させていく。試みが成功し紙が上手く宙に舞っても、B児は飽きずに集中し、次々と方法を変えて様々なやり方に挑戦し続ける。

【考察】

このエピソードでは、幼児が素材に触れることで以前の遊びの経験を思い出し、遊び始めていることがわかる。また、遊びの中で幼児が自分のイメージに向けてよりよい遊びの方法を試行錯誤しているが、その過程においては、素材の様子を観察しながら、素材が上手く宙に舞うように自分の身体をして遊んでいることが理解できる。ここから本エピソードで見られた幼児の創造性は、幼児—素材—身体の三項関係が基盤になっていると考える。

3. 社会学的視点

【エピソード3：黒なんやなあ】

黒の遊びが終わり、楽しかった遊びの興奮が少し冷めると、子どもたちは園庭に出て遊び始める^①。 C児も靴を履き替え庭に駆け出す。園庭へ出て2・3歩進んだところでふと立ち止まりしゃがみ込む^②。園庭の土をいじりながらC児がボソッとつぶやく。^③「土も黒なんやなあ。。。」^④C児はにっこり笑う^⑤と再び園庭へ駆け出す。



写真9 黒の遊びの後に園庭に出るC児

【幼児の経験】

- ①日常生活のリズムに戻る。
- ②身の回りの色に気づく。
- ③遊びの経験で得た知識を日常的に触れる
ものの中に見出す。
- ④気づきを言葉にする。
- ⑤土に新たな愛着を感じる。

【学びのみとり】

色の素材に触れながら楽しく遊んだ後に、日常の園生活に戻るC児。遊びの経験の後に、日頃慣れ親しんでいる園庭の土を目にする。そこでふと、先ほど遊んだ遊びで触れた「黒」という色の経験的理解と目の前にある土という物質が結びつく。土を「黒」として改めて認識した

C児は、その気づきを言葉に表す。C児は土へのまなざしを塗り替えたことにより、園庭の土により親しみを感じるようになる。

【考察】

このエピソードでは、遊びの余韻が残る中、幼児が生活世界に戻り、そこに常に存在している自然物に触れた際に気づきが生まれている。遊びを通じて得た「黒」に対する知覚と「黒」という言葉の情報が、自然物である土に触れた際に幼児の中で結びついている。同時に、幼児が日常に存在するものへの認識を塗り替え、さらにその対象へ「黒」という名前を付与することにより、自然物への新たな感情を芽生えさせている。ここから、本エピソードにおける幼児の創造性の基盤は、幼児—素材—自然物の三項関係であると考える。

4. 言語学的視点

【エピソード4：ポップコーン!!】

ニコニコとした笑顔で白い薄紙をくしゅくしゅに丸めていくD児^①。両手でぎゅーっと力を入れて強く丸め固めると「ポップコーン」とつぶやく^{②③}。次の瞬間、くるっと振り返り、「ポップコーン」と言いながら後ろにいた友だちに丸めた紙を見せる^④。D児のつぶやきと丸めた紙を目にした友だちはD児へ笑いかけると、丸めた紙をチョンチョンチョンと指でつつく^⑤。D児は、満足そうな笑顔になる^⑥。D児はさっきよりも大きな声で^⑦もう一度「ポップコーン!」という^⑧。2人の周りにいた友だちがD児の声を聞きつけて笑いながら近づいてくる。友だちがD児の作ったポップコーンにそっと触れる^⑨。その様子を見たD児はさらに大きな笑顔になる^⑩と「ポップコーン！！！」と叫びながら、丸めた紙を高々と掲げる^⑪。

【幼児の経験】

- ①素材との触れ合いを楽しむ。
- ②素材に触れながら、イメージがわく。
- ③自分のイメージを言葉で表現する。
- ④自分のイメージを友だちに伝える。
- ⑤自分のイメージを友だちに認めてもらう。
- ⑥友だちにイメージを認めてもらえたことに喜びを感じる
- ⑦一人の友だちに認めてもらえたことで自信をつける。
- ⑧より多くの友だちへ自分のイメージを伝えようとする。
- ⑨別の友だちにも自分のイメージを認めてもらう。
- ⑩友だちに認められることが重なり、深い満足感を得る。
- ⑪嬉しい気持ちを自分なりに素直に表現する。

【学びのみとり】

D児は気に入った素材に触れて遊ぶ中で、自分の生活のなかにあるものと、素材や色が結びつき、“ポップコーン”という見立てをする。見立てたイメージを言葉で表すと、そのイメージを友だちに伝える。自分のイメージが友だちに伝わり、また友だちに認めてもらうと、D児は自信を持ち、さらに多くの友だちに自分のイメージを伝えようとする。自分のイメージが友だ

ちに認められたことに満足を覚え、D児はますます表現を広げる。



写真 10 白い紙を両手で丸めていく D児 写真 11 ポップコーンに見立て友だちに見せる



写真 12 大きな声でほかの友だちにも見せはじめめる 写真 13 ポップコーンを高々と掲げる

【考察】

このエピソードでは、幼児が素材に触れて素材が変化することにより、イメージが想起されている。そのイメージを自分の生活場面で触れるものに見立てて、友だちに知らせようすることで、素材との対話から素材を媒介とした友だちとの対話へと遊びが転換している。さらに、友だちに自分のイメージが伝わり、かつ認めてもらうという経験を経るごとに、幼児の自信が深まり、それとともに表現の幅が大きくなっていくことが理解できる。ここから、本エピソードにおいては、幼児—素材—他者（×他者）という関係性によって、幼児の創造性が支えられていると考える。

IV 総合考察

本研究の結果からは、遊びという現象の中に幼児の学びのプロセスがあり、そのプロセスにおいては幼児の小さな経験のひとつひとつが幾重にも積み重なっていることが明らかとなった（図2）。これらを踏まえ、「色」を主題とした幼児期の遊びの可能性について、次のような点が見出される。

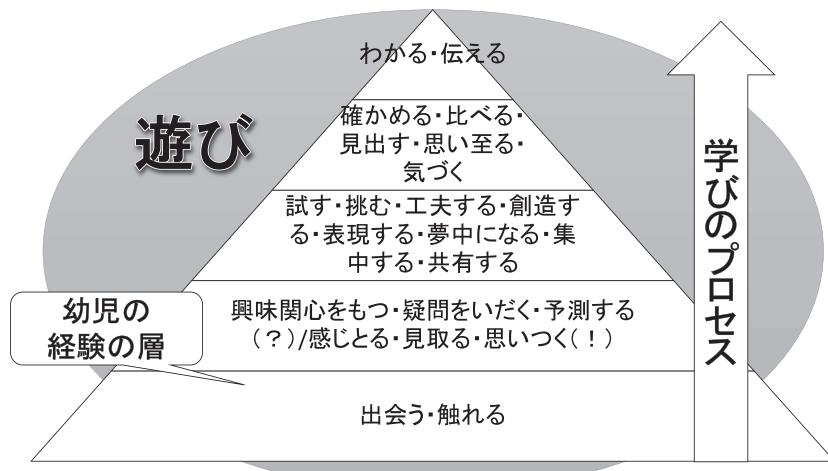


図2 幼児期における遊び・学びのプロセス・幼児の経験の関係性

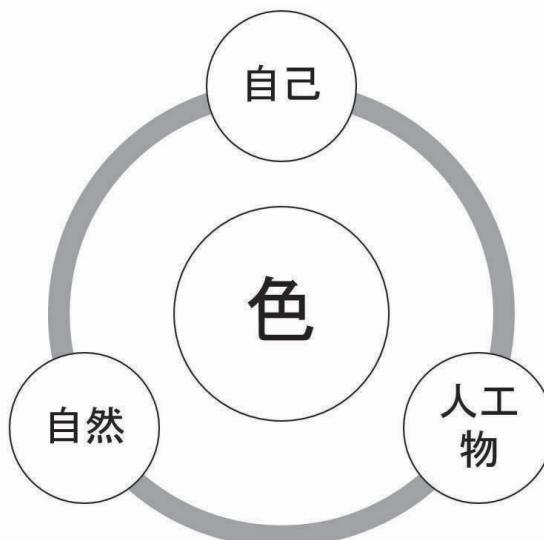


図3 色を中心とした自己・人工物・自然の関係性

1点目は、保育における遊びの質を高める可能性についてである。本研究の実践では、「黒」もしくは「白」という言葉で表されるひとつの「色」を設定して、実践を展開した。しかし、一見すると同じ「黒」や「白」でも、素材や素材の扱いによって色の見え方が異なり、そこから幼児のイメージや遊びの多様性が生じていることがわかった。今後は、様々な色の美しさを感じ取り、地域の色への気づき、色の世界の秩序理解へと繋がる活動を展開する計画である。その中で実践者が「同じ素材で色を比較、分類する」あるいは「異なる素材間で色を比較、分類する」という点に着目して幼児の気づきを支えることにより、幼児の色への気づきを深めて

「色の違いを自分（たち）のことばで表現する」可能性を広げて、幼児がより大きな外界へ踏み出す力を育てるにつながるのではないかと考える。

2点目は、小学校以降の「気づきの質」を高める可能性についてである。本研究においては、「色」という視点を通して、幼児が「自己・人工物（素材）・自然（身体・他者を含む）」の3者の関わりを基盤として、創造性を展開させていることが明らかとなった（図3）。これにより、幼児がそれまで気が付かなかった見方／考え方で自身の生活を捉えることにつながっていることがわかった。これらは、小学校の生活科における学習において、イメージに沿って進めようとしても決して直線的にはならない探究活動の道のりで、試行錯誤しながら思いもよらない「発見」をする力、そこから新たな目標を見つけて探究していく力を育てるにつながるのではないかと考える。

V 今後の課題

本研究で見出された幼児の学びに向かう姿においては、数学的な思考の芽生えにかかるようなエピソードも抽出された。ただし、本研究における視点が「芸術」「科学」「社会学」「言語学」の4つであったため、このような幼児の実態は分析過程で捨象された。ここからは、4つの視点ではとらえきれない幼児の学びの芽生えの実態があると考えられる。したがって、今後は「色」を主題とする活動において、4つの視点ではとらえきれない幼児の学びの芽生えをどのように取り込み、つなぐかという点を含めて検討することが課題である。

謝辞

本研究の実施にあたり、研究プロジェクトへご尽力いただいている大分県芸術文化スポーツ振興財団専務理事の照山龍治氏と塩月孝子氏に、心より感謝いたします。また、本研究の調査にご協力いただいた姫島村の子どもたちと姫島幼稚園の先生方へ深謝いたします。

付記

本研究は、平成28～31年度科学研究費基盤研究(B)(一般)(16H03799)の助成を受けて行ったものである。

注

- 1) 姫島村の子どもたちは4歳児までは家庭、保育所、幼稚園と各々の家庭事情によって生活を行うものの、5歳児になると村内の子ども全員が姫島村立姫島幼稚園の年長児クラスへ進級・入園して1年間を過ごし、そのまま同じ子ども集団で小学校へ就学する。このような地域事情を踏まえ、本研究では調査当時姫島幼稚園に在籍していない幼児を含め、次年度に年長児クラスへ在籍を予定している4歳児全員に参加してもらった。これにより、本プロジェクトにかかる活動に

- については、村内の幼児が同じ活動の経験を経て年長児クラス・小学校での活動を進めていけるよう配慮をした。
- 2) 注1)に示したとおり、本稿における実践を行った時点では姫島幼稚園に在籍しておらず、幼稚園の場を初めて経験する幼児もいた。

参考文献

- 1) 藤井 弘也・藤井 康子・麻生 良太・都甲 由紀子・西口 宏泰・木村 典之(2017)「幼小期における地域の色をテーマとした探究学習の研究(I)」『大分大学教育学部研究紀要』第38巻第2号, 25-34.
- 2) 文部科学省(2013)「平成25年度～平成29年度 第2期教育振興基本計画」
- 3) 大分県教育委員会(2015)「大分県教育大綱」
http://www.pref.oita.jp/uploaded/life/1006960_1042093_misc.pdf(2017/05/17 情報取得)
- 4) 松村明監修(2012)『大辞泉 第二版』小学館

A Study in Discovery-Oriented Learning about the Typical Colors in a Local Area for Kindergarten and Primary School Education (II)

—With a Focus on the Learning of Kindergarteners —

OHNO, A., ASOU, R., KIMURA, N., FUJII, Y. and NISHIGUCHI, H.

Abstract

This study is a part of an educational practice research project on the theme of "local color" in Oita done by a study group organized by Oita University and Oita Prefecture Arts, Culture and Sports Promotion Foundation (OPAM). The purpose of the study is to clarify the actual process of learning in early childhood which is the foundation of a discovery oriented learning model with the theme of "color". In this paper, we analyzed the learning process of kindergarteners through play with the colors black and white from four viewpoints (art, science, sociology, linguistics).

【Key words】 Early Childhood, Color, Discovery-oriented learning